

北村稔著

『第一次国共合作の研究』

——現代中国を形成した二大勢力の出現——

石川 禎 浩

一

近年の日本では、一九二〇年代の中国政治史、あるいは革命史（その中心が国共合作の下に展開された国民革命であることは言うまでもない）に関する研究書が陸續と出版されている。主なもののだけでも、狭間直樹編『一九二〇年代の中国』（汲古書院、一九九五年）、緒形康『危機のディスクール——中国革命 一九二六—一九二九』（新評論、一九九五年）、栃木利夫・坂野良吉『中国国民革命——戦間期東アジアの地殻変動』（法政大学出版局、一九九七年）、周偉嘉『中国革命と第三党』（慶應義塾大学出版会、一九九八年）をあげることができる。「政治史」や「革命史」の限界が叫ばれて久しい中国近現代史において、これら研究の盛行は一見不可解に見えるかも知れない。しかし、「革命」が後景に退いた今こそ、今日の中国をとりまく政治状況になお強い影を落とす国共合作の歴史を、冷静に再検討すべき時なのである。それ

らの著書が、濃淡の差はあれ、今日の日本の対中国認識や中国共産党（以下、中共と略す）の思考枠組みの来源をたずね求めようという指向から出発していることは、そのことをよく物語っている。

そして、今日の中国現代史の枠組みに決定的影響を与えた「第一次国共合作」そのものを主題とする本書が現れた。本書は、長年にわたって第一次国共合作の研究に、独自の見解を打ち出してきた北村稔氏が、これまでの研究を集大成して世に問うた著作である。本書は、これまで氏が『史林』などに発表した七篇の論文を基礎とし、さらに武漢政府時期の論考（第六章）を加えることによって、第一次国共合作の全貌を示すものに再構築されている。また、既発表の諸篇も、主旨にかかわるような大幅な書き換えはないものの、本書の全体構成に沿う形に修正、もしくは改訂されている。まずは、本書の構成を示そう（各節はさらに小見出しに分かれるが、余りにも多いので省略する）。

序章 中国近現代史と第一次国共合作

一、第一次国共合作成立の背景 二、中国近現代史に決定的影響を与えた第一次国共合作 三、第一次国共合作の光と影——政治的效果と内包されていた矛盾—— 四、第一次国共合作の歴史的意義付けをめぐる論争

第一章 第一次国共合作の成立

一、コミンテルンとソ連政府による中国への働きかけ 二、難航する合作の船出

第二章 第一次国共合作の展開

一、新生の政治勢力の実態 二、国内政局の変化と国民党の対応 三、国民革命勢力の台頭

第三章 広東国民政府における政治抗争と蒋介石の台頭

一、財政の統一と整軍の進展 二、国共合作の動揺 三、中山艦事件の勃発 四、蒋介石のヘゲモニーの確立

第四章 北伐開始後の第一次国共合作の実態

一、蒋介石の独裁権力 二、蒋介石独裁と共産党および国民党各派との確執 三、蒋介石独裁体制の動揺

第五章 蒋介石と共産党の全面衝突

一、第一次上海暴動 二、再開された暴動計画 三、蒋介石と共産党の衝突

第六章 武漢国民政府の崩壊と第一次国共合作の終焉

一、武漢国民政府への異なる視点 二、武漢国民政府の財政破綻 三、武漢国民政府下の農民運動の展開 四、国共合作崩壊への道 五、国共合作崩壊の開始 六、南昌暴動 結びにかえて

北村氏は本書を、「政治的立場から生み出されていた『通説』の誤り」を正したものと位置づけ、「第一次国共合作の全期間を包括して『会議記録』などの一次資料を丹念に検討し、現在の問題も含め前後の歴史状況を『客観的』にふまえた長期的視座から合作の経緯を詳細に論じた研究は、本書が最初であろう」と自負する（はじめに）。したがって、本書の価値は、ひとえにその自負がどの程度まで妥当かということにかかっていると言ってしまうだろう。本書評の多くは、その検証にあてられる。

さて、その検証に先だって、北村氏が問題にしている、「政治的立場から生み出されていた『通説』の誤り」ということを簡単に説明しておく。国共合作史研究は、合作した両党がその後、血で血を洗う不倶戴天の關係に転じたため、今世紀の多くの歴史事象以上にイデオロギー対立にさらされてきた。ゆえに、国共合作史研究においては、後の政治的立場の対立によって付与されてきた解釈（北村氏のいう「通説」）から個々の歴史事実を解き放つという作業が、今なお、強く求められているのである。その政治的解釈——近年ではすでに相当程度のりこえられているが——をごく簡単に言えば、次のようになる。中共の枠組み：軍事力を背景に権力を握った蒋介石ら国民党は孫文の遺志に違って反共化し、国民革命を挫折させた。国民党の枠組み：国民党内に寄生した共産党は様々な謀略により国民革命を破壊した。かかる認識の対立のために、国共正式合作の出発点である国民党第一回全国代表大会（一九二四年一月）の経緯にはじまって、広東政府への反乱である商團事件、廖仲愷暗殺事件、蒋介石台頭の契機となった中山艦事件、孫文が策定したとされる「三大政策」、国民政府の武漢移転問題、蒋介石のいわゆる四一二クーデター、そして武漢国民政府の崩壊と国共最終決裂（一九二七年）の経緯等々にいたるまで、つまり国共合作史の節目節目の事象が、長年にわたり複雑に入り組んだ政治的解釈に影響されてきたのである。

かくて、国共合作史の研究は、このような政治的解釈のためにことごとくに食い違う見解を、ひとつひとつ再検討することから出発しなければならぬということになる。本書において、氏の精力は、この作業を時に大胆な推論を交えて、積み重ねることに費

やされている。そして、北村氏は、「国共合作の継続を最後まで試みた人物」(一二三頁)とされる蒋介石の動向を中心にすえて分析を加える。恐らくは、蒋介石の日記をもとにした『民国十五年以前之蒋介石先生』を熟読することにより、「蒋介石の数多くの真摯な演説に動かされ、「なるほど、この人は真面目な人だ。共産党の批判にいうような人ではない」との確信を得た」(一二九頁)ことが、氏の蒋介石に対する独特の親近感につながっているであろう。そのさい、分析の視角として設定されているのが、中共のみならず国民党内にも移植され、同党の面目を一新させた「ボルシェヴィズムの組織論」の中国における有効性と、「ボルシェヴィズムに基づく新組織の有効性を十二分に発揮させた」(一二三頁)蒋介石の真摯な政治姿勢、およびその政治手腕の巧みさである。

また、国民党内の派閥抗争、政治力学、中国の伝統的政治風土への着目、本書を特色あるものにしていくということも、指摘しておいてよいことだろう。すなわち、「国民党の各領袖には」政治主張にも相違が見られた。しかしそれ以上に、出身地域により互いに反目していた」(一一五頁)、あるいは、武漢政府に結集した国民党指導者の反蔣運動は、「左派の革新イデオロギー」からではなく、派閥間の権力闘争の次元で行われていた」(一七〇頁)という表現に代表される視点である。北村氏のかかる視点は、単なる研究上の視点にとどまらず、「旧秩序が崩壊し始めると、その徹底的破壊をめざす民衆の暴力がたやすく出現する中国社会」(一二八頁)という氏の中国観にも通底しているものであると考えられる。

二

先にも述べたように、本書は「通説」の誤りを正すことをうたっている。論述の端々に見える挑発的となえる字句(例えば、「共産党側の研究は事態をどのように記述し、自らの主張を強弁するのである」(一二二頁)、「これを「七月十五日反革命政変説」に結び付けるのは牽強附会の最たるものである」(一二三頁)など)には、北村氏の意気込みがよく表れている。それは、従来の国共合作史研究(主に中国大陸と台湾のそれ)への強烈な異議申し立てと言い換えてもよいだろう。具体的に言えば、商团事件に英国の支援はなかった(二章二節)、中山艦事件は突発事件ではなかった(三章三節)、国民政府の武漢移転はボロジンの陰謀に非ず(四章三節)、いわゆる蒋介石の「四一二クーデター」に虐殺なし(五章三節)、武漢政府の崩壊は経済政策の破綻による自壊であって、経済封鎖などなかった(六章二節)、武漢での七月一五日の分共後にただちに共産黨員への迫害が始まったわけではない(六章五節)、などが本書の打ち出す新見解である。これら新見解の中には、にわかには首肯しがたいものもある(後述)が、「ボロジン陰謀説」の否定や武漢政府の経済破綻の実相、武漢分共の経緯など、長らく不鮮明だった問題のいくつかに光をあてた点は評価されるべきである。

北村氏のこれら見解を支えているのは、国民党中央の会議記録や中共の内部通達など、これまで充分に活用されることの少なかった原資料である。そして、氏は国共両党の要人の言動の背後にある微妙な意図を、錯綜する当時の政治状況に照らして大胆に読

みとろうとしている。これによって、読者は当時の国共両党が保っていた複雑な関係と、その後の歴史解釈が生み出されるに至る契機と経緯とを、北村氏の解釈に沿って、体験することができ仕組みになっている。その点で特に強調すべきは、その心のひだにまで分け入った蒋介石の政治手法にかなする分析であろう。黄埔軍官学校校長としてのストイックな姿勢、ソ連軍事顧問団との間の軋轢、中山艦事件への関与、汪精衛復帰問題と国民政府移動問題での駆け引き等々、その時々における蒋介石の対応をこまめに踏み込んで解説することは、『蒋介石——マクロヒストリー史観から読む蒋介石日記』（黄仁宇著、東方書店、一九九七年）の訳者である北村氏にして初めて可能なことであろう。

三

だが、これら本書の特色を認める一方で、評者は同時にその特色そのものに潜む大きな問題点を指摘せざるを得ない。あえて断言すれば、本書の中核をなす蒋介石の行動に関する記述は、歴史的的分析というよりも、むしろ新聞の政治欄によく見られる政界風聞式解釈の積み重ねであるとの感を免れないのである。そして、蒋介石を再評価せんとする氏の従来からの意図が、個々の分析に先立って見え隠れしているため、全体を通じて、論証や分析がその意図に沿う形に巧みに誘導されているという問題点がある。以下、その典型的な例をいくつか取り上げてみたい。

まずは、蒋介石の政治手腕、手法に対する政治評論家風の視角である。本書には「面子」をキー・タームとする政治手法、特に蒋介石のそれがたびたび解説されている。例えば、「蒋介石は見

事に実をとった。……表面は汪精衛復帰を要請する電報で共産党と左派の面子を立て、同時に自分の面子をも立てる。……実にしたたかであり、権力闘争における蒋介石の非凡さを如何なく示す」（二一八頁）、「共産党とコミンテルンの指導下に」などという枕言葉は、表面は相手の面子をたてながらも実をとる、中国人一流の言辭である」（二一九頁）、蒋介石の辞任は、「解任されるという面子の喪失を避けたのである」（二三九頁）、という記述である。かくて、蒋介石の政治手法は、「極めて心憎い方法であった」（二二一頁）と説明され、「面子」を大事にするかれの「したたか」さや「非凡」さがかれの台頭と覇權をもたらしたとされる。他方、先行研究にたいする氏の批判も、それらが蒋介石に対して「甘い人物評価」をしている、「甘く見ている」（八九頁）という判断からなされることになる。こうした説明が歴史学的手法として広く受け入れられるものであるかについては、疑問なしとしない。さらにかかる視点から蒋介石を見たことによつて、蒋介石と中共との対立の原因は解明されず、両者の勝敗が政治的手腕の差に還元されるのみで、対立は自明のことがらとして放置されている。中共はコミンテルンからのたび重なる指令の下、国民党内に留まつての国民革命の継続を厳命されており、他方、氏によれば蒋介石は「国共合作の継続を最後まで試みた人物」であつた。とすれば、なぜ蒋介石と共産党は対立せねばならなかつたのかという根本問題について、政治評論ではない氏の見解がほしかつたところである。

また、先行研究を論破せんとする余りの資料の「深読み」と、いわゆる「通説」なるものの「極端化」があちらこちらに散見さ

れる点も、「通説」の見直しや「客観性」を掲げる本書の価値を大きく損なってしまったように思われる。例えば、中山艦事件が蒋介石によって予定されたものであるとの解釈（八一―八七頁）である。ここで北村氏は、ソ連の軍事顧問であったチュレバノフの説を支持しているのだが、それを補強せんとして、蒋介石日記の「友」「客」に関する削筆修正を検討している。つまり、蒋介石は中山艦事件の前後に行動を共にした「友」なる人物を際立たせたいために、その前後に登場する「潘文治」（事件には関係のない人物）を同じく「友」と削筆修正したのだ、と説明するのである。この段は、確かにそう読めないこともないが、「深読み」のわりには、事件の「計画説」を補強するには焦点がずれている。にもかかわらず、氏は「蒋介石が」追いつめられ突発的に行動する体の人物だと見なされておれば、あれほどの恫喝力を長期間發揮するのは不可能であった。人々には蒋介石の行動が、突発的でなかったことが感知されていたのである」（八九頁）という独自の判断にもとづいて、結論を導き出しているのである。このような論証の仕方は、氏の批判する「有利な傍証だけを固めるやり方」に對置するに、「深読み」と独自の判断を以てしているとの印象を免れない。こうした資料の「深読み」は、汪精衛帰任問題を巡る「請汪速回任案」の字句の読み方（一三三頁）においても感じることができ、「微言大義」を發揮しすぎたきらいがある。総じて言えば、氏の行っている「通説」の是正は、資料の精読にもとづいているかに見えて、実は推測や推論による断定である場合がまま見受けられるのである。

他方、北村氏が「通説」と呼ぶものの中には、ずいぶんと昔の、

あるいはいささか「極端化」された「通説」が混じっているようである。その一例は、蒋介石の四一二クーデターの「真相」に触れた部分に見受けられる。氏はそれに関して、「蒋介石には国共合作の破棄を、一方的に宣言し、直ちに共産党に極刑をもつて、臨むなどという考えは全くなかった」、「通説」となっている四月十二日事件にさいし上海街頭での共産党員の公開処刑など行われるはずがなかった」（一四頁、傍点は評者による）と述べている。

この段、傍点部分の条件をすべて付けければ、確かにそうは言えるだろうが、果たしてそれは「通説」と言えるのだろうか。評者は「上海を血で染めた四一二反共政変」という通説風表現は知っているものの、「街頭で」「公開処刑」が行われたという「通説」を知らない。また、いわゆる四一二クーデターの持つ意味は、四月一二日のその日に上海の街頭で処刑や虐殺があったか否かにあるのではなく、蒋介石がそれ以後、実際の行動によって反共の立場を明らかにし、国共合作の一部が破綻したということにあるはずである。しかしながら、氏は「四月一二日の公開処刑」に拘泥することにより、デモ隊への発砲があった一三日以後の展開についても、それが蒋介石の意図ではなかったという解釈をせざるを得なくなっている。つまり、「素手の民衆に発砲すれば武漢側や共産党から反革命の証だと非難されるだけで何の得もなかった。」「一三日の」第二十六軍の発砲には偶発性が大きいのではないか」（一六五頁）という解釈である。これは、蒋介石ほどの人物なら得にならないことをするはずはないという論証であるが、蒋介石が北村氏の言うように見事な政治手腕を持つのであれば、大問題になるに違いない上海の流血事件に対して、「偶発性」をゆ

るはずはないという反論も可能となろう。上海での武装暴動を扱ったこの第五章の前半部分が、その暴動を指導した中共側の会議記録などの諸資料を渉獵して書かれた相当に詳しい分析であるのに対して、四一二クーデターの「真相解明」を掲げる後半部分は、かけ声倒れに終わっていると言わざるを得ない。

四

最後に、今日の国際的學術水準から見た場合の本書の価値について一言しておきたい。本書が日本の中国近現代史研究、特に蒋介石の評価問題に一石を投じるものであることは間違いない。だが、近年とみに活発化しているこの方面の世界水準を物差しとした場合、本書が海外の学界に与える寄与は、残念ながら、大きいとは言えない。それは、最近公刊された、いわゆる旧ソ連アルヒーフが利用されていないという問題である。

国民革命、第一次国共合作に外側から決定的影響を及ぼしたのが、コミンテルンとソ連であったことは誰の目にも明らかな事実である。ソ連の解体ののち、それまで長らく秘匿されてきたコミンテルン文書などが、次々に公開されていることもよく知られている。かかる状況の下、一九九四年以来、中国革命にかなする旧ソ連アルヒーフの編纂、独語と露語による出版が、ロシア・アカデミー極東研究所とベルリン自由大学の提携によって実現しているのである。現時点では、一九二〇年から一九二七年にかけての文書（四七三件）が公刊されている一方、その部分の中国語訳も出版されており、中国革命史研究に極めて大きな衝撃を与えている。また、それら文書を積極的に利用した研究もすでに世に問

われ、「通説」を陳腐化する華々しい成果を挙げている。^②今や国民革命や第一次国共合作の研究は、以前では考えられない資料状況の下に、イデオロギー色を排して再構築されつつあるのが現実である。本書において、これら新資料がまったく利用されていないことは、甚だ残念なことであった。

それら新資料によって得られる新事実を、本書と逐一照らし合わせることは、紙幅の關係から不可能であり、ここでは一、二を簡単に触れるにとどめることにする。その一つは、一九二六年七月の中共中央執行委員会拡大会議「中央政治報告」の事後修正（蒋介石ら中間派への妥協）の問題である（一〇六一〇九頁）。北村氏は、その修正へのヴォイチンスキーの介在を指摘し、瞿秋白の報告などをもとにして「共産党側の蒋介石に対する方針には、非妥協的立場を主張する陳独秀、当面は妥協しつつ押さえ込もうと考えるボロジンや粵区の共産黨員、全くの妥協派のヴォイチンスキー、の三者があった」（一〇八頁）とする。しかし、新資料によれば、当時、蒋介石が進めようとした北伐に対して、反対の急先鋒であったのは、ヴォイチンスキーその人であり、北伐への反対論として知られる陳独秀の「論国民政府之北伐」（嚮導一九二六年七月）は、実はヴォイチンスキーとの合意の下に執筆されたものであった。また、ヴォイチンスキーは、蒋介石に妥協を繰り返すボロジンと激しく衝突し、さらにはモスクワに対して、ボロジンの召還さえ要求していたのである。つまり、「中央政治報告」の事後修正があったとすれば、それは「中国のブルジョアジーおよび郷紳に対する闘争を強化することは、現時点では時期尚早であるとともに、極めて危険である」とするソ連共産党中央

政治局のヴォイチンスキーへの警告（一九二六年一〇月、新資料所収）に見られるモスクワの意向を受けたものであると考える方が、自然なのである。また北村氏は、全くの妥協派とするそのヴォイチンスキー観を敷衍して、邵力子（国民党代表・蒋介石の代理人）のモスクワ派遣にもヴォイチンスキーの介入を想定し、邵力子のコミンテルンでの演説にはかれの意向が反映されているとする（一二九頁）が、新資料に含まれている邵のコミンテルン宛て報告によって、これもまた覆されることになる。

むろん、この新資料で北村氏の研究のすべてが否定されるわけではない。逆に、氏が提示した解釈の中には、新資料によって裏付けられるものもいくつかある。例えば、国民革命における国民党の一元的指導を認めるよう迫るその邵力子のコミンテルン宛て報告は、ヴォイチンスキーの介入という点を除けば、それが蒋介石のソ連に対する巧みな働きかけであったという北村氏の指摘（一二八―一二九頁）を見事に裏打ちしているのである。この点、北村氏の直感の鋭さには敬服せざるを得ない。だが、それゆえにこそ、この新資料やそれに依拠するここ数年の研究成果を利用して、本書の内容のある部分にははるかに豊かに、そしてはるかに説得力を持ったであろうことが惜しまれてならない。また、すでに書き換えられているいくつかの「通説」を、ことさらに取り上げる必要もなかったことだろう。北村氏がロシア語資料を扱える日本で少数な中国史研究者であるだけに、なおさらその感は深い。

資料の探求にはキリがない。あの資料が出るまで、この資料が出るまで、と待っていたのでは、何時になっても成果は発表でき

ない。研究者は資料収集のある時点で区切りをつけねばならない。だが、こと本書に限っては、そのタイミングは決定的に悪かった。今後、国共合作史を含む中国革命史研究は、上記新資料の刊行により、「新資料刊行以前」「以後」という研究史の時期区分がなされるであろう。率直に言って、本書は前者の最後の成果となつてしまった。北村氏が本書刊行のために、せめてもう一年か二年かを費やし、新資料を使用していれば、本書は蒋介石再評価ということ以上の価値を持ったことだろう。北村氏は「本書の刊行により、筆者と第一次国共合作との二十年以上の付き合いには一応の終止符が打たれる。今後は……「自由な研究の境地」に遊びたい」（二三〇頁）とおっしゃっているが、願わくば、それはもう少し先に延ばしていただきたい。

なお、本書に関しては、『東洋史研究』に江田憲治氏による書評が準備されている。併せてお読みいただければ幸いである。

- ① ロシア語版：ВКП(б), Комитет и Национально-Революционное Движение в Китае : Документы, Т. I. 1920-1925, Москва, 1994., ВКП(б), Комитет и Национально-Революционное Движение в Китае : Документы, Т. II. 1926-1927, Москва, 1996. エンゲル語版：RKP(B), Komitet und die national-revolutionäre Bewegung in China : Dokumente. Band 1. 1920-1925, München, 1996, KPdSU (B), Komitet und die national-revolutionäre Bewegung in China : Dokumente, Band 2. 1926-1927, Münster, 1998. 中国語訳：中共中央党史研究室第一研究部訳「聯共（布）' 共产國際與中国国民革命運動（一九二〇―一九二五）」（北京図書館出版社、一九九七年）、同「聯共（布）' 共产國際與中国国民革命運動（一

九二六～一九二七】（上、下 北京圖書館出版社、一九九八年）、李玉貞訳『聯共、共產國際與中國（一九二〇～一九二五）』（第一卷、東大圖書公司、一九九七年）。

② 楊奎松『中間地帶的革命』（中共中央党校出版社、一九九二年）、楊奎松『中共與莫斯科的關係（一九二〇～一九六〇）』（東大圖書公司、一九九七年）、李玉貞『孫中山與共產國際』（中央研究院近代史研究所、

一九九六年）、郭恒鈺『俄共中國革命秘檔（一九二〇～一九二五）』（東大圖書公司、一九九六年）、郭恒鈺『俄共中國革命秘檔（一九二六）』（東大圖書公司、一九九七年）。

（A5判 一三三頁 索引・注六六頁 一九九八年四月

岩波書店 五二〇〇円）

（神戸大学文学部助教授